

バレーボール選手は「不得手」をどのように語るのか
～折り合いをつける過程に着目して～

樋口 公洸 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)
指導教員 豊田 則成

キーワード：不得手 吟味 一時的折り合い 克服 役割遂行

1. 緒言

本研究は、『バレーボール選手は「不得手」をどう語るのか』というリサーチクエスション(Research Question:以下 RQ と略す)を設定し、質的にアプローチした。そこでは、バレーボール選手の「不得手」における語りから折り合いをつける過程に着目し、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした。

2. 方法

本学バレーボール部に所属している選手9名をインタビュー調査の対象者となるインフォーマント(情報提供者、以下 Informant)に設定し、質的研究法の代表的手法である、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach) を行った。

3. 結果と考察

本研究は、バレーボール選手の「不得手」

に折り合いをつける語りから概念図 (Fig.1) を生成し、RQ に対して折り合いをつける過程に着目して研究を行った結果、《不得手に気づく》《不得手について吟味する》《克服に向けて取り組む》《不得手を克服する》《一時的に折り合いをつける》《役割遂行に徹する》の6個のカテゴリーグループが生成された。

4. まとめ

本研究は、『バレーボール選手は「不得手」をどう語るのか』という RQ に対して、『バレーボール選手は「不得手」に気づくと、不得手について吟味する。そして克服に向けて取り組むことで、不得手を克服する一方、一時的に折り合いをつけることで、自身の役割を遂行することに徹する。これら2つの流れから再び不得手に気づくことに回帰することで、循環的過程を辿ると語る』という仮説的知見が導き出された。

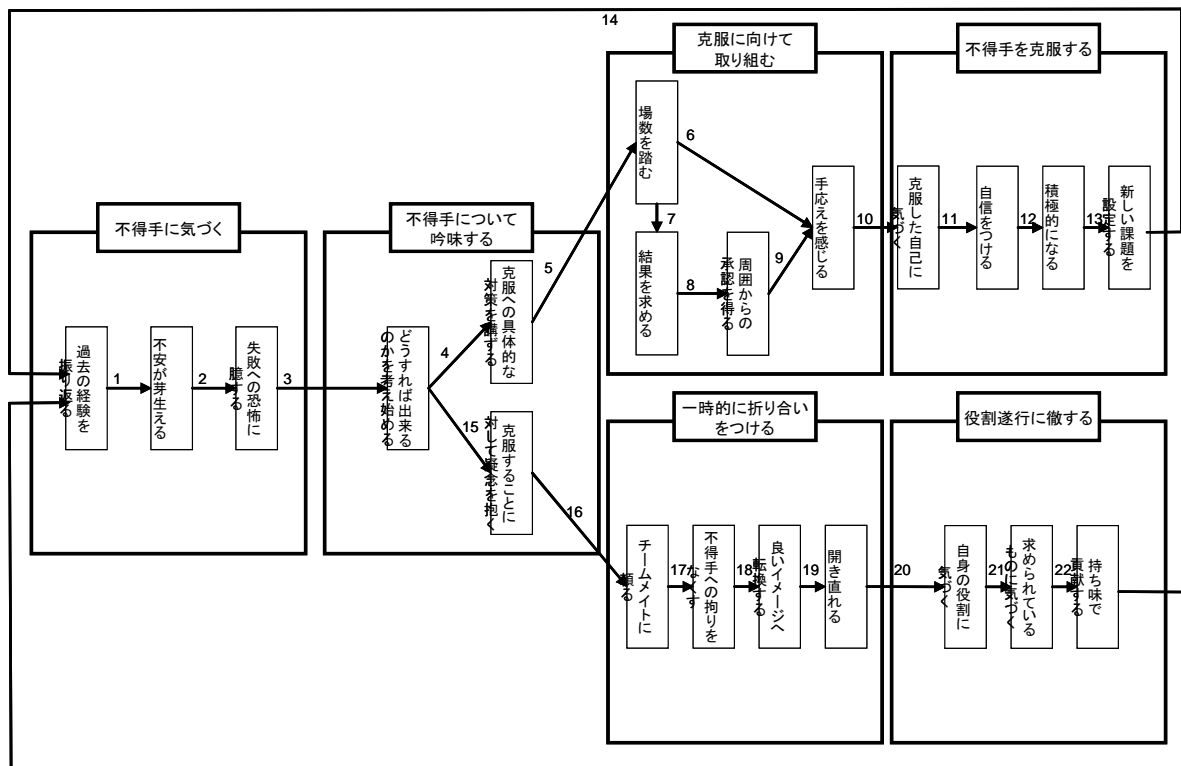


Fig. 1 不得手を克服していくサイクル